

島田清次郎未定稿翻刻 I

The Reprinting of Unfinished
Manuscripts by Seijiro Shinada I

小 林 輝 治

島田清次郎が残した「保養院」時代の草稿三編を選び、次に紹介したい。

これは、「昭和文学研究」第八集・第八集（昭58・2、同59・1）の紹介に続くもので、謎の多い清次郎の最晩年を、これによってさらに明らかにしようと考えたものである。

いずれも、終わりに「一九二五年五月十日」とある短編「縁」と同じノットに書かれているところから、その執筆は、一九二五年、つまり入院の翌大正十四年、もしくは大正十五年に入って書かれたものと推定される。

「偉大なる中学生」は、国鉄に勤務した西野芳頭（明26―昭59没）をモデルとしたもので、その従兄水谷を敦賀に訪ねる主人公野島の事を書いたものである。普選論とか労働組合というこぼが、次々飛び出してくるところは、入院後も一向に衰えない彼の社会的関心を物語って興味深い、構成としては、彼の屈折した女性への意識を描き出したものである。

「あの海軍中将の令嬢はどうしたのだい。」「そのまゝに放ったらかしてある。向ふがくれないんだから、どうにもしようがないぢやないか。ハッハ。」海軍中将の娘とは、勿論、あの舟木芳江を指しているものであろう。「とにかく先方の娘は君を思ひつめて、むこうから通って来て、君に、いはば生涯を捧げたのだから。」「さうかな。」

ここには、依然として未練というか、芳江を思いきれない清次郎の素顔が、はっきりと現われている。なおこの一文において、主人公の少年時代M・P・Mで入院したとあるが、このM・P・Mは彼の造語で、実際には、蓄膿症を意味するドイツ語 Empyem（エンピエム）を略したものであろう。事実清次郎は、若い頃蓄膿症で随分悩んだといわれている。また冒頭の、水谷を直接訪ねる理由となる「何かしらむ不愉快な暗示」・「その頃、旅行する毎にいつも襲はれる、どうも自然でない、人為的な、ことによったら悪意であるかも知れぬ不愉快」というのは、舟木芳江事件以後の、彼に対する世間の嘲笑を反映したものであろう。

そういう意味では、未完のため最後に紹介したが、「不二子」を次に読んでもらうべきかもしれない。この作品では、もはや単なる世間ではなく、「何ものとも知れぬ一つの勢力」・「帝国政府の手先き」に追われ、どこにも行き場をなくしてしまう、そういう男として描かれている。それでも男は、どこかへ落ちつき、何かを書きたくて必死である。「坂下の小さな古本屋が目につく。彼れは携えてゐた四、五冊の本をかゝえてその店前に嬰兒を追ってゐる未だ年若い主婦さんの前に出して、打つつけるやうに、『いくらでもいゝ。買ってくれ。』そういつて彼は「彼女の出す銀貨を」ろくに調べもしない。そしてほっと息をついていう。これで「どうにか原稿紙代と電車賃ができた。」

小 林 輝 冶

事実、舟木芳江事件以後、どの出版社からも原稿をボイコットされてしまったという清次郎である。入院直前の大正十三年夏、泊る所のない彼が、郊外の墓石・公園のベンチにもたれ夜を明かしたという、盛時の彼を知る者には全く想像もできないような話も、恐らくはほんとうであったと思われる。

ただ、あとで「警視庁」のとも書いている「何ものとも知れぬ一つの勢力」に追われたという事は、これは、ほんとうにあったものかどうか。しかし、戦前の中学において、彼の「地上」がきわめて危険な作品として扱われていた、そういう一事をもってしても、私は、このくだりを単なる被害妄想として一笑すべきではないと考える。清次郎が「保養院」に強制収容されて数年、昭和三年には、既に「三・一五事件」で知られる共産党の大檢舉、さらに治安維持法の改正、「特高」の設置が行なわれているのである。「不二子」とい

う女については、書かれた二章までに、当の人物が登場せず、したがって今一つよく分からないが、権力に追われて苦しむ主人公を、究極において助ける、そういう女の存在として語りたかったものであろうか。そうだとすれば、ここにも舟木芳江の幻影が消しがたく隠されているような気がしてならない。

ところで「金剛舞台」は、清次郎にしてはちょっと毛色の変わった作品である。北一輝や大川周明への関心をほめかしたり、アイシユタイン博士のユダヤ人問題を書きこんだりという所は、いかにも清次郎らしいと眺めることができる。しかし全体としては、宝生の家元を継ぐ能楽師佐竹義輝（「松本長」の子という設定になっている）が、関東大震災の折り、親子で競演した「金剛舞台」に駆けつけ、その舞台を守って自分も死ぬという、いわば一種の芸道小説と見られるものである。そういえば、能狂言に詳しいとして幸田露伴や泉鏡花の名が挙げられているのも興味深い。またここに出てくる芸妓千菊は、彼の初恋の人と噂されるきく（明31生／小説「地上」の小菊のモデル）を、やはり念頭においたものであるう。

なお、翻刻にあたり、とくに留意したのは次の諸点である。

① 漢字、かなづかい等の明らかな誤りについては、その横に「ママ」を付す。ただし、あとで漢字を入れようとして先にルビを付したものの、及び歌詞等をあとで入れようとして空欄とした部分については、 を、さらに判読のきわめてむずかしいものについては、その字数相当分を「X」で示してある。

② また、横へ補正する際、誤って直前の助詞等を重用したもののについては、その不用のものに「」を付した。

③ さらに漢字のうち、「常用漢字表」にあるものは、その字体によって統一した。

偉大なる中学生。(小説)

嶋田清次郎。

一、

京都から敦賀までの間、彼れは何かしらむ不愉快な暗示に苦しまねばならなかった。

その頃、旅行する毎にいつも襲はれる、どうも自然でない、人為的な、ことによつたら悪意であるかもしれない不愉快をできるだけ忍耐してゐたが、とうとう我慢し切れなくなつて、一人の従兄が、敦賀の運輸事務所に勤めてゐることを想ひ出して、下車してしまつた。

スチームの通つたボギー車の中で蒸したてられたやうだった混濁した空気が解放された彼れは、ぶらっとふおむに吹き寄せられた凍つた残雪、凍つた水溜りの上を、かぢりかぢり踏みながら、歐羅巴露西亞の停車場を想はず、珍らしい石造建築の駅の建物の、古びたのを感じ乍ら、従兄のつとめてゐる事務所を訪ねてみた。

「水谷さんは、一昨日から御病気で休んでいらつしやいます。」

女事務員の一人がこたへた。

彼れは港に沿ふた市街までの、可なりに遠い、野原の中の広い道

を歩むのだ。折りからの冬風は残りの粉雪を吹きつけて、彼れを悩ました。水谷を訪ねることは、彼れ自身の避難でもあったが、三、四年前彼れが湘南の海辺に住んでゐた時分、訪ねてくれたお礼旁、でもあった。

敦賀の市街は、この前、夜汽車の疲労を恐れて一夜泊つたことがあるきりだった。

別に変りのない、雨風に古ぼけた低い木造建ての家屋が、狭い街路をはさんで、冬の寒さに戦慄してゐた。街角のところどころに、なにがし海軍少将の講演のビラが、貼り出されてある。

従兄は、この市街での大通りの裏通りの、同じ運輸事務所へ勤めてゐる青年の家に寄宿してゐた。その家の向側には、ペンキのはげかゝつた教会堂があつた。

従兄はその二階で、臥つてゐた。教会堂から、恐らく鍵のこはれかゝつたせいであらう、鈍い音がひびいて、讚美歌の音が、きこえた。

「どうしたのだ。」と、彼れは水谷の枕頭にすわつて、汗ばむでゐる彼れの病状をたづねた。

「いや、別に大したこともない。」と、水谷はしばらくして起き上つて、衣ものをきかへた。「実は、今日は、少しおくれでも出勤しようとしてゐた処だ。」

「事務所に君があるかと思つて、訪ねたところが、君は風邪をひいて休んでゐるといふことだった。大したことなくて、よかつた。」彼れは、次の部屋にあぐらをかいて、冷めたい清い処女空気に、心臓の底まで洗はれてやうやくよがへつたやうに吐息をついた。

二、

久しぶりで、それは凡そ四年ぶりになるのだったが、簡素な朝食を共にしながら、彼れは水谷がしきりに説く普選論に耳をかたむけてゐた。鉄道役員の制服が海軍の士官制服の模倣であることなども、彼れは説いた。

彼れは、少し古くはあったが世界大戦終末期に於ける亜米利加の 'Plant Plan' の問題について話した。日本の鉄道はすでに国有になつてゐることなども、彼れは話してゐるうちにさとして妙な気がせぬではなかった。

「その上院議員に会ふたのかい。」と、陰鬱な青年の希望を幼芽につまれたものの持つ深い悲哀のこもった薄ら笑ひを時々もらしてゐた水谷は、とうとう持前の快活な皮肉さでたづねた。

「うむ、ワシントン大使館につれてもらつて会ふたには、会ふたのだよ。勿論先方のしゃべることは、己れには分りやしない。悉く大使館員に通訳してもらつて、やつと分つたわけだが。」

食後の、金ヶ崎神社への散歩を軽るくことはつて、彼れは、蔑をふかして雑談に耽つた。

「岡山丸は今でもうらじおすとおっくへ航海をつづけてゐるかしらむ。」

「ううむ。」水谷は手で嫌なものを払ひのけるやうに、「岡山丸は樺太航路へ移転してゐます。」

彼れは、未だ西比利亜の曠野から、徴兵しない以前に、友人の砲

兵将校にすゝめられて、その船でうらじおすとおっくへ遊びに出かけようとして、従兄へ手紙を出して心配をかけたことがあった。

「それで村にある家の方はどうしてあるの。」彼れは、激しい労務に日々つとめてゐるらしい従兄の前に、やゝ度ましい氣持にかへつてたづねた。

「土曜日ごとに家へ帰ることにしてゐるのさ。」

水谷はまた、どうにもならぬ宿命を負ふものの薄ら笑ひを浮かべた。

長兄が、妻と乳のみ子を残して死んでから、大酒家の老ひたる父と、自作ではあるが激しい労働を必要とする農家と、教育を必要とする三人の弟妹を、双肩に背負はねばならなくなった時、水谷は青年の日の希望と恋愛を一擲して、兄の残した嫂をめとり、老ひたる父と、三人の弟妹の教育と兄の遺子の将来への責任を負ふたのであった。

「亡くなった兄の子はもう五つになった。己れの子は去年男の児が生れた。」

水谷は面を伏せて仕方のない運命に負けた自分を冷笑するやうにわらつた。

「家へかへるごとに、田甫の手伝ひをしてゐるのさ。妻一人が、家のことは引き受けてやってくれてゐる。弟は県立農学校へ通つてゐる。妹はこの間、東京へ行儀見習に奉公に出した。」

彼れは嫌なものを悉くはき出すやうに言つて、さて、さっぱりしたやうに、重い肩の荷をおろしたやうに、ごろりと横になつて、

「いつまで、一人である君は豪いよ。——あの海軍中将の令嬢は

どうしたのだい。」

「そのまゝに放ったらかしてある。向ふがくれないんだから、どうにもしようがないぢやないか。ハッハ。」

「アッハッハッハッハ。」と水谷もとうとう彼れの口調のあまりに、「何んでもないさ」に哄笑いだした。「君はづるいよ。とにかく先方の娘は君を思ひつめて、むこうから通つて来て、君に、いはゞ生涯を捧げたのだから。」

「さうかな。」彼れは、蔑を吐かして、受け流しながら水谷をみると、水谷の瞳に、熱い涙がやどつてゐた。その涙は彼れの胸をうたづにはゐなかつた。

三、

それは十年も以前の事実である。

彼れが未だ故郷の市街で、毎日図書館通ひをしてゐた時分のことだが、その図書館生活にも一区劃をつけて、京都へ出発しようとして、三、四年間のせいと思はれた、ひどいM・P・Mを根治す可く市街一番の私立病院へ二週間ばかり入院してゐたことがあつた。

その二週間の病院生活は、M・P・Mを根治したばかりでなく、貧窮と過度の勉強のためにひどく神経質になつて、始終何か病氣にとりつかれてゐるやうな妄想を一洗して後ちの華々しい出世の門出に役立った。

その僅か二週間ばかりの病院生活の間のことだつた。彼れは母に朝夕、通つてもらつて炊事をしてもらつてゐたが、遠い能登の田舎

あたりから来てゐる人々は、家人がつききりで世話をしてゐた。孤独で読書生活に没頭してゐた彼れには、それらの人々とのわづかな間の生活は、どれだけ、彼れの生来の快活な性格をよみがへらしたか分らない。

半島の町から来てゐる結婚前の穏やかな少女や、市街の未だほんの子供に過ぎない芸妓や、非常の時にはあらひ緋の単衣に紅い模様のある帯をお太鼓に結んで、快活に、遊びにくる看護婦や、それに、野球の選手であるといふ、彼れが出た中学校の四年生が、彼れのグループとなつて苦しい手術前後の生活を楽しくくらしただつた。

その五尺四、五寸の背丈のある中学生の田野は、彼れの向ふの部屋でいつも仰向けに寝そべつて、大きな声で歌をうたつてゐた。田野よりは二、三日先きに入院した彼れは氷嚢をほうたいした額にあてゝ、づきづき痛む手術のあとの悩ましさを堪えてゐたが、ついで大きな歌の聲に微笑んで、軽快な心にかへつて田野の部やを訪れるのだつた。

「野島さん、近頃学校で流行つてゐるめづらしい歌を教えませうか。」

「うむ。」すると、その巨大な中学生は、大きな声で奇妙な調子で彼れの「バイスラケ・ラケン」をうたい出した。

「桜三月、あやめはがつがつ（五月）、稚子の盛りは十五、六、それもそうかいなバイスラケ・ラケン。」

「肥後の熊本バイスラケ・ラケン、バイスラケを歌へば首がとぶそれもさうかいなバイスラケ・ラケン。」

「女取る手で天下取る、それもそうかいなバイスラ

ケ・ラケン。

「ふうむ。」彼れは、案外に渋い唄の調子と、わりに男性的な唄の言葉と、その中学生の豪放さに感心して耳をかたむけずにゐられなかった。彼れはいろいろのことをたづねた。

田野は、水谷の生家のある村からほど近い郡役所在地の末原の町の、廓くわくに近い表通りの、醬油屋の一人息子だった。彼れはたづねられるまゝに、近在で一番社格の高い神社の祭礼の話や、彼れの家の物干台から廓の家と屋根つゞきであることや、彼れが物干台の栽培の菊に肥えをやったら、その翌日の雨で、その肥えがとなりの家の風呂槽の中へ流れこんで、一時その近所の大問題だったことなどを話して大笑させた。

「そのとなりの家つてのは、 屋つて言やしないかい。」

彼れは仰向けになって後頭をかくて、いゝ気になって聞いてゐたが、不図、その頃、母の実家に、彼れと共に寄宿して鉄道局へつとめてゐた水谷の養子先きらしい直覺に、眼をひらいてききたゞした。

「さうです。」田野は得意になって、運動家に特別の快活さで話した。「その家の娘のきみ子と僕は仲よしになってゐます。今日の午後、女学校からの帰りに寄つてくれます。」

「関係はあるの。」

「うん、あるとも。」偉大なる中学生はからからと、その、夏の夜の物干場の秘蔵の回想に、哄笑してやまなかった。

「あいつ、黙つて身を委せてゐたっけ。」田野は言ひはなつた。

彼れは、その偉大なる中学生の高らかにうたった「女取る手」の

非凡さにある驚異を感じつゝ、何も知らずに従兄の水谷が、その家の養子問題に悩んでゐるのを思ひ出して、一条の憂鬱に襲はれずになかった。彼れは、従兄から、よほど腐れ水の城濠をめぐらした今はあとかたもない松林の公園になつてゐる東京の城趾で、すでにこの無心な偉大なる中学生に征服されてしまつてゐるきみ子と、市街の女学校からの帰り遊び、あひびきした事実を感傷的に告白されてゐた。

——その日の午後、彼れは、薄暗らい田野の部屋に、つゝましくすわつて、手土産の水菓子すゐぢやをすゝめてゐる一人の小柄な、伶俐らしい、折り目正しい の椅いすをはいた女学生を発見した。

窓からは、病院横の、青々とした梧桐の葉が、初夏の微風にゆれてゐた。

「きみ子さんってあなたなの。」

彼れの向ひに、彼女は黙つたまゝうなづいてみせてゐた。

——水谷の養子問題はいつとなく立ち消えとなつて、彼れもそのきみ子のこととは忘れてゐたのである。

四、

敦賀湾は、冬の薄日をうけて、波の細かい、深い青藍の洋を湛えてゐた。二、三千噸級の汽船が、船腹を露はに、関東地方へ移送されるらしい材木を陸上してゐた。何となくうそ寒く淋しかった。

浜辺の暖爐の暖かな料亭で〔で〕ビールをあふつて、相互の健康を祝しあつた彼れは、石灰のこぼれた木材倉庫の通りを歩きながら、

「色街へ案内しようか。」といふ従兄の申出をことはった。

そして、何んにも知らぬ従兄のために、十年前の偉大な中学生のバイスラケ・ラケンを歌った。

へ女とる手で天下取る、それでもそうかいなバイスラケ・ラケン。水谷は彼れのために、鉄道従業員の組合が、いはゆる縦断組合であつて、たとへ鉄道が国有になつてゐても、必しも垂米利加に於ける労働組合や、鉄道従業員の組合聯合と同じ性質のものでないことを路々、説明した。

(をはり)

金剛舞台。(小説)

嶋田 清次郎。

一、

彼れが代々木の邸にゐた時分のことである。

邸宅が、丘陵にかこまれた盆地に在ったせい、夜など凍みつくやうに寒く、書斎にこもつて論稿をすゝめてもどかしい程容易にはかどらなかつた。何かに呪はれてゐるやうな物凄く寒い、頭脳の痛む夜もあつたが、そこはもと武蔵野の原っぱで、荒れはてた池を埋めたものと分つた。

「未だ土地が人の氣に和まされてゐないのだ。」彼れは呟やいて、好んで訪問の客に会ふやうにとめた。

一千九百二十三年五月々末のある午後、申し合はせて来たのではないかと思はれるほど前後して二人の客が訪れた。

一人は彼れが未だ下宿にゐた時分から知つてゐた法学士で、もと「国本」の記者だつた。彼れは北一輝や、大川周明などいふ論客をあげて、一度会つてゐても損なことはあるまいとすゝめた。「昨日は上杉博士のお供をして帝大乗馬部の貴公子連といっしょに追浜航空隊までいつてきた。昨日が五月廿七日で日本海々戦の第十八周年にあたつてゐるのを若い短剣に知らされて□にさわつてならなかつた。甲軍は山城、長門、第四第五の両駆逐隊、航空部隊、乙軍は岩手、阿蘇、第三駆逐隊、第三潜水隊、航空部隊、といふ編成で、軍艦対軍艦の砲術戦、駆逐艦隊の白目下に於ける敵艦襲撃、潜水艦の敵航空機の射撃、などを見せつけられたが、例として、東郷伯はじめ当時の海戦老雄をも、振付してあるらしかつた。簡素な立食の後とで、短剣の中どころの奴が、垂米利加大西洋艦隊と太平洋艦隊の一大合同編成の容易であり、太平洋海戦にあたつてはパナマ運河は、一大艦隊を有するに等しきことを、バルチック艦隊の敗因がスエズ運河を通過し得ずして、喜峰を迂回したるに存する事実を引例して説明してゐたので、僕は、垂米利加各州公私大学に於ける軍事教育と、英米両国に比較すれば日本全体がプロレタリアットであることから、伊太利のファシステの現勢力を述べて説きかへしてやつた。」と、笑ふのだった。

「兎に角、日本海大戦は当時の聯合艦隊司令長官東郷伯の言ではないが、全く天祐といふほかはなかつたのだ。英吉利がナポレオンとその聯合國の海峡封鎖から脱却しようとして、仏蘭西聯合艦隊を

ネルソン提督が、あの西班牙艦隊を撃破した、英吉利艦隊を率いて追探してゐた苦痛を思つてみるがいい。バルチック艦隊はわざわざ対島海峡の藻くづと消え失せるために赤道直下の熱帯の太平洋を超えてやってきたやうなものだ。しかもネルソンは最後のドウヴァ海峡の一戦で海死してゐるが、東郷平八郎提督が負傷した話はきかない。尤も、東郷平八郎に人妻の情人があつて、非常に光輝ある戦功に禍ひした話もきかないが。彼れは哀をくゆらして、窓の扉をあけて、すでに初夏の新緑とすがすがしい薫風を入れた。

「——ネルソンの戦死が、ウエリントン公を〔を〕して、あの天才ナポレオンの死命を利せしめたことは事実だ。」と「国本」記者は忌々しい昨日の記憶の余憤をもらすやうに微笑した。「日本海大戦の天祐による勝利がわづかに、満州駐屯軍の全滅と、日本の経済的破産を救つたのとは大分、事情を異にしてゐるやうですな。」

彼れと彼れ等は、もしルーズベルトによる亜米利加合衆国の講和提議がなかったならば、日本は、ことによつたら世界大戦後に於ける独逸であつたかもしれぬことを回顧せずにはゐられなかった。

もう一人の客は、彼れと同郷で、その頃宝生宗家に起居して松本長や〔 〕などいふ家元に師事してゐる、すでに有望な能役者であつた。彼れにとつては十数年来の知り人であり、全く珍客に相違なかった。佐竹は、渋い色の錦紗お召の袴をはいて、全体に渋い、彼れなどよりもずっと都会人らしい磨きがかゝつてきてゐることを見のがせなかった。

「君が正月送つてくれた雑誌は大へん面白く拝見した。あの口絵

の写真はすてきだった。」と彼れは正月恐らく年□代りにであらう、贈られた能楽専門の雑誌のお礼を言った。その口絵には、九段の能舞台で舞ふた彼れの「将門」が、さういふ社会の名家とともにうつされてあつた。

「アインスタイン博士が未だ滞京中に、金剛舞台の私共の定例素能を観てゆかれました。有島武郎氏なども見えたやうです。野島さん、あなたも一度ぜひ御出下さい。」

「ぜひ一度ゆきたいと思つてゐる。」彼れは、また、つくづくと佐竹を見直すのだった。

「トムソン教授がアインスタイン博士を□した一事実も、単に学問といふ見地からばかりでなく、アインスタインが Jewish であることを考への中にいれて考へる時、大英帝国々民の度量の大きいことが分る。」

と言ひかけたが、彼れにそのうち上杉博士や北、大川、などいふ一味ロマンティックな心情生活をする人々に会ふ機会を作る約束をして辞し去つたのである。

「七、八年前、故郷の市街で会つた時には、君は長野水力電鉄の事務員をしてゐるといつてゐたやうだったのに、すっかり都会人になつてしまつてゐるぢやないか。」午下りの応接間へ、日のめぐる陰影がさした。

「故郷へは、時々、家元といつしよに、招かれてゆきます。古老が、僕の成長を喜んでくれます。」「時々、帰省れるやうですね。」

彼れは時々、帰省する時、新聞の社会面に、宝生会例会の見出しで、さういふ名家の間に佐竹の名を見出す喜びを想ひかへさぬで

はなかった。一種神聖なものとされてゐる禪門の古刹の舞殿で、月の清く、美しい、秋を、「将門」などを謡ひ舞ふ佐竹を想ひ浮かべた。

「一度ぜひ、その金剛舞台を見せてもらはう。」彼れはくりかへした。

二、

梅若万三郎が独立して、自ら宗家となったその社会の一事件の真相などをききただしてゐるうちに、日が暮れてしまった。

「玉川へ鮎でも食べにゆくといいのだが、」と彼れは久々で訪ねてくれた佐竹を、赤坂の心易い家へ案内するつもりで一緒に外へ出た。「去年の暮、岐阜へ行った折り、師匠といっしょに市街の豪商に招かれて、長良川の鵜飼を見ってきました。」佐竹はあるき乍ら何か別の事を考へてゐるやうに話した。「鮎は、何んといつても、長良川の鮎が本場だけあるやうです。」

「うむ、——玉川の鮎も、薄い金ぶらにすれば×ざらでもないよ。」彼れは、赤坂見附で下りて、薄宵の裏通りを佐竹の背を軽ろくたゝいて、歩いた。

「この間青山の□家で梅若の『勧進帳』をきいたよ。今夜は僕が奢らう。」

さういって、彼れは、佐竹をつれて、どちらかといへば、あまりめだゝない「藤の家」をたづねた。

その夜は折りよく、いつもは聘しても容易に顔をみせない、舞妓

たちが、都合よく合はせて、彼れと佐竹の間をとりなした。彼れは、佐竹のために鳥などをとって、久しぶりでくみかわさずゐられなかった。

最初は彼れの連れてきた初対面の佐竹を、何ものとも見当がつかずに、舞妓たちは、遠まきにじろじろみつめて彼れ一人へ話しかけてゐた。佐竹が、顔を赤めて、「熱くなった、野島さん失礼します。」と彼れが、昼の間から目をつけてゐた錦紗お召のはかまを抜いで、さっきから「篤二さん」がどうの「喜七郎さん」がどうの、二人の間の話題になつてゐた岩木男を、「男爵ってのは、先生、何んだか五段ばかりあるうちの一番下の爵位ぢやなくって。」とききかへしてゐたひとりの濃艶高華な舞妓の前へほうり出して、「おい、たゝめ。」と、彼れがすゝめてをいた正面の座へすわり直した。

「菊千代ちゃん、たゝんであげてちょうだい。」と、潜龍はちらと彼れへ氣をかねるやうに眸をおくつて、そのはかま、となりの年頃の菊千代の前へ、大切なものを取り扱ふやうに、そつとよけた。

「あら、こちらの方は舞台へおたちになるのよ。」

菊千代は、それでも珍らしさうに、佐竹へ、媚を作つて、そのはかまを、白魚のやうな指で、たゝんで、「これでいゝでしょ。」と頭をかしげてみせた。「何流なの、こちらの先生は。」

佐竹は急に人の善い得意な笑でいっぱいになって、菊千代に酌をさせて、ねじをかけた旋風器のやうにしゃべり出した。彼れは、佐竹のしゃべり出し様が余りに急激で、そのしゃべり方が「ねじをかけた旋風器」のやうに止め度もないのに、沈鬱な、厳肅な公人としての彼れの甲冑をぬがされて、哄笑出してしまった。

佐竹の家は、前田家百万石の統治下における、文化文政の文華のあとを承けた彼れの郷里に、今でも残つてゐる、幾軒かの謡曲の名家のあとであるといふ噂だった。しかも、彼れはいつ訪ねても佐竹の家に、彼れと彼れの母と彼れの妹しか見ることができなかった。佐竹が学校で、どうかすると、おどけた真似をするのも、あながち佐竹の性格からくるものではなくて、彼れの家庭に何か暗^{ママ}らしい影があるのではないかと考へられた。

中学を卒業してから佐竹は何んでも神戸高商へはいったといふ噂であつたし、彼れは、高等学校へはいってしばらく消息をきかなかつた。七、八年前に故郷の市街で友人の素封家の提案で佐竹と同席した時には、佐竹は、長野の水力電鉄の社員をしてゐるといふことだった。佐竹は、友人と二人で、素謡をした。佐竹が、東京へ出て宝生宗家にはいつて、すでに一かどの能役者になりすましてゐるといふ噂は、その後しばしば耳にせぬことはなかった。たゞ、友人の誰れも彼れもが、結婚して身をかためるのに、どういふものか、佐竹の結婚の噂は耳にしなかった。

佐竹が、あの暗い屋敷町の旧士族町の古い名家の養子であることはきいてゐたので、あの、華やかな快活な妹が、義理の妹であつてその妹を貰つて結婚するのだらうと、彼れは単純な頭で考へてゐた。が、その夜の佐竹の告白では、よく佐竹の勉強間である二階の六畳間へ、茶菓などを運んできた快活な妹は、異父妹であつて、彼れの真実の父は、前の宝生宗家の家元の□であつて、母は佐竹を「あづかつて」佐竹家へ再縁したものであつた。佐竹はそれを知らずにゐた。それのみか、母はその妹を、真相を知らずに、佐竹に

めあははうとする素志をもつてゐることが分つた。

「自分はかりにも、妹の名のつくものをめとるわけにはゆきませぬ。」

さういつて、佐竹は、何も知らぬ子供の時分から、何も知らされずに、謡曲や能や仕舞を仕込まれてきた、口惜しさに泣いた。

「己れにはさういふ立派な実父がゐるのだ。結婚なんぞ何年遅れたっていい。己れは父のあとを承ぐ可く仕込まれてゐるなら、己れは父の膝下へいつて、父その人から教えをうける。」佐竹は、一、二年勤めてかなりの信用を同僚や上役に得てゐた「水力電鉄」を止めて、父のもとへはしつたのである。

「尤もこつといふ醜男の己れにも、一人や二人、あの女ならと思ひこむだ少女がゐないこともなかったのだ。」

今は一切をぶちあけるものの雄弁と情熱と大胆さで佐竹は、その胸の仄かな秘密をさへ語つた。

「長野にゐた時分のことです。自分の下宿してゐた家は、その市街の芸者置やに近い裏通りだった。ある夏の宵のことだった。自分は一人の同僚と、町はずれの萩や□梗や月美草の伸び放題に伸びてゐる高原へ、蛭狩りに出た。そして、ある色街に近い街角に佇んでゐると、セルの普段着の単衣をきて、めりんす打あはせの帯をしめて、襟白粉をさも稚拙にうつすらとぬつて、豊かな黒髪のびんを、黄楊の櫛でかきあげた、ほっそりと、伸びたひとりの湯上り姿の少女が、自分の前を通つてゆくのです。そのえりあしの、何んともいへぬほんのりしたさわやかな未熟なからだつき、色艶^{いろご}、自分の世界とは全然別な、さわやかな「Finger」な世界が、上品ではあるが、艶

「まあ、それで、あなたは、黙ってみてゐた切りなの。その別所の温泉で。」

「ううむ、さういふわけでもないのだ。そのどら息子の留守の間に、冷めたいキスを一つもらつた丈けだ。」

彼れは、その佐竹と、五月下旬の午前一時頃の宝玉のやうな星のちりばめられた夜空の下で別れた。佐竹は神田小川町の宗家まで歩いてかへるといったので彼れも、代々木まで歩いてかへつたのである。

あの千古未曾有の地震がきたとき、その金剛舞台は焼けた。佐竹は、その騒乱の間に、金剛舞台へかけつけて、父の死んだ金剛舞台とともに、焼け死んだといふことであつた。

彼れは、赤坂の一夜の物語りの間に、口ずさんでさせた、 の一節を今も、耳許にきくごとに、佐竹の生涯のために、涙ぐむのである。

(をはり)

不二子。(小説)

嶋田 清次郎。

一、

その頃彼れは、「自分の家」といふものを持てずに、何ものとも知れぬ一つの勢力(それが何んであるかは当時の彼れには了解でき

なかった。後ちに帝国政府の手先きであることは分つたが。――に追ひまわされてゐた。何処へいっても落附きといふものがなかつた。たとへそれが、数年来の知人であっても、幼ない時分から友人の家であっても、一日と落附かぬうちに、不思議なやぶが対者との間に生じてきて、どうしてもその家を去らねばなくなるやうに、その何ものとも知れぬ一つの努力が、要らざる「蛇の知恵」を、対者にそぐやうに見えた。もっとも、ある友人は明らかに、「警視庁から、君が来たら届け出るやうに、といふて来てゐる。」とこととはって、一夜の宿をことほりもした。

彼れは、その日も四、五年前、未だ書生時代に下宿してゐた旧い下宿を訪ねて、二、三日の「休養」をどうにか獲得してゐた。「このまゝ、もとのやうに宿がしてもらへないか。」と彼れがその主にたづねても、ことはられてしまった。「当分、どなたにも月極めのお宿はお断りしてをります。」

雨あがりの、花びらの土に汚れた泥濘の街を、曇つた空の下を、彼れは、仕方なしに、一人で、どこへゆくといふあてもなしに、本郷高台の坂道を歩かねばならなかつた。薄白い午後の日が冷えきつた都会の上に漂ふてゐる。灰色の空を、爆音をたて、一台の飛行機が飛んでゆくのも、彼れには何んの感動も与へなかつた。

坂下の小さな古本屋が目につく。彼れは携えてゐた四、五冊の本をその店前に、嬰兒を負つてゐる未だ年若い主婦さんの前に出して、打つつけるやうに、「いくらでもいい。買ってくれ。」そして、彼女の出す銀貨をしらべもせずによぎのぼけつとに落しこんで、ほっと息をつく。

「どうにか原稿紙代と電車賃ができた。」彼れは、もはや、東京市内で、快よく、彼れのPrideを傷つけられずに寄りつける彼れの知人や友人の家はないまでに、追ひつめられてゐた。

「久しぶりに、柳^{やなぎ}×をたづねよう。」彼れは、四、五日前から森ヶ崎海岸の、彼れの未だ、「青年（それは少年といつてもいい、）の薈」の傷つけられぬまゝに残つてゐる、彼れにとっては、忘れ得ぬ一軒の鉱泉旅館へ身を寄せようかと考へてゐたのである。

二、

彼れが何かしら下劣な、たとへようもない卑賤な一つの勢力に追ひまわされてゐるやうな感覚は、彼れが帰朝してから絶えず、何かの機会につきまとまつて、暗示されてゐたのだったが、それが何人であるかは分らなかつた。

四、五日前も、彼れは同郷後輩の学生達が寄宿してゐる、友人の新聞記者の家へ立ち寄つて、学生達がそれぞれ彼等の私立大学へ通つてゐる留守の時間を、彼等のみすばらしい部屋を唯一の避難所として、壊れかけた本棚、あかじみた座布団、古びた机、色のさめた湿めつた畳、 疲れ果てた肉身を休めてゐた。彼れには、今自分が、求めてゐるものが、何であるかを知らぬわけではなかつた。彼れの内なる創作的原理は、自由な時間を求めて止まなかつた。しかも、何かしら一つの勢力は、彼れを追^おし、彼れから、創作に必要な時間をさへ奪ひ去るのである。彼れには、その実に真実の人の生命を阻害するメフィストフェレスから、完全に彼れ自身を守るに必要な経

済的富——金を持たなかつた。彼れはそれを自覚してゐたが、彼れの唯一の独立した、「清純な財源」である、創作を発表する自由——といふよりも、彼れの創作を発表する雑誌編集者や（や）出版者の自由を、権力の末輩と××が阻害してゐるのではないか、と疑はれた。彼れは仰向けに、精根も尽きたやうに打^ぶつたをれて、雨あがりの灰色の空を打ち仰いでゐると、薄白い鈍い日の光の作れる雲間を黒点のやうな鳥がとんでゆく。垣根の向方に色あせた散りぎわの梅花^{めい}の雲の上に、病院の青塗りの建物が見える。——そして、彼れの脳裡に縹渺として、太平洋の彼方の国々のことが、彼れに強い表現の慾望をもつて迫ってくる。彼れは携^もえもつた薄い手帳に「世界の人々。」と題を書いてみる。が、終日、追迫^おされ通しの彼れには、それを表現する時間も精力も気力もなくなつてゐる。彼れは後輩の学生達の書棚を見まわすが、読んでみたいと思ふほどの書物は一冊も見当たらないのである。たゞ測り知れぬ縹渺たる表現と実行の不能を抱きしめて、うとうとと寝入つてしまはねばならない。友人の姉が、寝入つた彼れに薄い蒲団をさせる。——

しかし、夜が、この原町のさゝやかな家にも訪れる頃、階下へは電×会社へ勤めてゐるといふ姉の主人が帰つてきて、寝入つてゐる彼れに退去を迫る。友人の新聞記者も、学生達も、この×××の先輩が、こうも無力で、窮迫して一人の下級会社社員にさへ及ばないでゐるのを不思議さうに凝視める丈で、どうにもできないでゐる。「こつちふ奴に、怒鳴られるやうになつたのか。」と、彼れは自分に呟^{ささ}やき乍ら、彼れの非礼をとがめることさへ自分に対する 徳のごとく考へられて、そのまゝ、その家を、雨の降る夜を立ち去つ

たのであった。

そして、友人の一新聞記者が「三井は Spring の本部だ。」といった言葉を、いったい何のことかしらと考へてみるが、それも分らなくなつて、権力の Spring の手が、彼の身辺に迫つてゐること丈けが、感じられる。——原町の友人を訪ねたその夜のことであつた。その頃窮迫しつくしてゐた彼れは、宿屋へとまる持ち合はせがなくて、彼れが未だ何ものかに「追ひ立てられぬ」以前、ひいきにしてゐた待合へいって、「芸者は要らぬ。どこでもいゝから泊めてくれ。」と、芸者ヌキに待合泊りをして歩いてゐた。が、その彼の信用もさう長つゞきはしなかつた。遂には彼れはよく知りもしない一度か二度、何かの会合か、友人の招待でたづねたやうな顔なじみの家へまで「一夜の宿」をたのまねばならなくなつてゐた。

「それは御無理でしょ。こうしてあなた、時間まで、うれしがつて御相手をしてゐるのぢやありませんか。可哀さうに。」と時間から、かへさうとする若い出たて妓を、女中がかばひました。

「それなら、己れの方で帰る。」彼れは飲みなれた洋酒の酌をさせる程度ならとにかく、この、全体の階級をして考へてみれば、可哀さうでもあるが、たゞの「肉袋」としか考へられぬ妓を抱いて寝る気にはなれなかつた。その夜も、さういふ感情のゆき違ひがあつた。一、二度、ある華族の友達に連れられていったそのあるきりのその社会では、彼れが、遅くなつてから「一人で寝る」といふことを、たゞの冗談か、対手に出た芸妓が気に喰はないのかと考へちがへて、「一人で寝る」ことをゆるす代りに、幾人（おとこ）となく、後口（あとぐち）をかけて彼れの気嫌をとり結ばうとするのだった。

しかも、彼れには、翌朝、近く（ちかく）のずる分前（ぶんぜん）から何か書いてくれとたのんでゐた友人から稲料（いなりょう）を借りるあてがあるきりで、懐には使つてはならぬわづかの金しかなかったのである。

「仕方がございません。御一人でお泊めするわけには参りませぬ。どうぞ御かへりを願ひます。」と女将（おかみ）は、つけをもつて出た。その態度が、彼れには、ひどく意地悪（いぢあく）な、故意に彼れの弱点をにぎつて、虐めるもののやうに思はれた。

「何時だと思ふ。今から帰れると思ふか。」彼れは寝足りない焦々しさもまじつて、半ば本気で怒る。「それに明日の朝にならなければ、持合はせはないから。——帰れといふなら、帰る。勘定はこの次ぎにしてくれ。」彼れはほんとうに怒つて、二階の階段を下りる。